



TITLE:

「論衡」に於ける意・數・體

AUTHOR(S):

小池, 一郎

CITATION:

小池, 一郎. 「論衡」に於ける意・數・體. 中國文學報 1983, 35: 1-36

ISSUE DATE:

1983-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177403>

RIGHT:

「論衡」に於ける意・數・體

小池 一郎

同志社大學

王充（西曆二十七年生）は、文章というものを構造的に認識した、恐らく中國最初の人である。これは、文章の自己發展としての所謂「散文」が、「論衡」に於いて既に成立していることと無關係ではあるまい。拙論は、王充自身の文章認識を手掛りとして、その「散文」を讀もうとする一つの試みであると考えられたい。

一 「意」「數」「體」の概念

私が注目したいのは、「論衡」正説篇の次の一文である。

夫經之有篇也、文字有意以立句、句有數以連章、章有體以成篇、

（それ經の篇有るや、文字に意有りて以て句を立て、句に數

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

有りて以て章を連ね、章に體有りて以て篇を成す。）

正説篇は「論衡」全八十五篇の第八十一に位置する。そして右の一文は、經書一般についての論述である。しかし、そこには、「論衡」を書き綴ってきた王充自身の著作體驗が反映しているのではなからうか。以下、正説篇に見えるこの考え方を吟味しつつ、「論衡」の文章を検討してゆきたい。なお、「論衡」の編次については、種々の問題が提起されてきたが、私は、現行テキストはおおむねそれ本來の姿を正しく傳えていると考えている。⁽¹⁾

「論衡」の第一逢遇篇は、次のように始まる。

操行有常賢、仕官無常遇、賢不賢、才也、遇不遇、時也、

（人はいつも賢明に振舞うことはできるが、いつも出世に恵まれるとは限らない。賢明か否かは才能次第であるが、出世するか否かは時の運による。）

王充が正説篇に言う如く、文字が意味を成して、はじめて「句」となる。例えば、「操」「行」「有」「常」「賢」の文字（漢字）は、各々意義（その漢字の表示する意味）を有するの

みて、それ自體では意味を形成し得ない（傳達機能を發揮できない⁽²⁾）。「操—行—有—常—賢」と並べられて始めて意味（傳達機能）が生じる。意味形成の主體は作者（王充）である。したがって、「意」は單に「意味」を示すばかりではなく、作者の「意」（これについては次に述べる）でもある。かくて「句」が出来る。「句」は意味の實現される「場」である。「文字」「意」「句」の總體を、王充は「文」と見なしている（超奇篇）。

「文」の生成については、超奇篇に王充の詳しい言及がある。それによれば、まず「胸中」に「思」が生じる。「思」とは、「眇思」とも呼ばれて、未だはつきりとした形をとらぬ所の、ある氣持である。別の見方をすれば、それは、文字の漠然と浮游する状態であらう。この「思」に一定の方向を與えるのが「意」である。「意」もやはり「胸中」にある。「思」と「意」は、合わせて「心」と呼ばれる。我々の言う「意思」が或いはこれに近いかも知れない。一定の方向を與えられた「思」は、「文」として外に現われる。

「文」はひとり「意」を表わすのみではない。「意」「思」

はこの時には既に「意」に取りこまれている」と「情」を含む胸中の在り様⁽³⁾精神の全體がそこに露見する。それが「實」であり、その最高の状態を王充は「實誠」と呼ぶ⁽⁴⁾。

ところで、王充の言う「句」は、少なくとも「論衡」の初期諸篇にあっては、一般に“sentence”の意で用いられる「句」とは質を異にする⁽⁵⁾。ここでは、「句」とは、「對偶」を内包した文なのである。つまり、王充の意味形成の仕方は、對偶と不可分のものであり、意味形成は對偶を成して完了する。ただし、對偶性は王充の意志するものではなく、彼の「存在」によって規定されている所の、思考の型^{パタン}である。それは、文章生成の過程にしのびこむ歴史性である。「賢」に對する「不賢」、「遇」に對する「不遇」、「操行」と「仕官」、「才」と「時」。一見嚴密に組み立てられた文型（對偶）は、本來嚴密には造られていない人間の心にはめられた「枷」の如くして、苦痛を呼ばずにいないことを豫知させる。

さて、「句」には「數」が必要である。さもないれば、「句」は「章」へと展らぬ^{ひろが}（句有數以連章）。ところが、對

偶性を本質とする「句」の數をいくら増益しても、何も起らない。極端に言えば、そこには横の緊密な繋りはあるが、縦に論理を進める力が缺けている。正説篇に言う「數」は、單なる數ではないのだ。例えば「道數」と言う言葉がある。⁽⁶⁾「數」は單に「數」のみならず、「筋みち・論理」の意をも含む概念である。⁽⁷⁾つまり、「句」を「章」にまで飛躍させる爲には、「論理」の力が要る。

私は、王充はこの論理の力を、漢代の對策奏文等の政治的文章が持つ論理性に負っていると見うける。例えば、

道雖同、同中有異、
志雖合、合中有離、
何則——
道有精麤
志有清濁也（逢遇篇）

（道は同じと雖も、同じき中にも異なるもの有り、志は合うと雖も、合う中にも離るるもの有り。何となれば則ち、道には精麤有り、志には清濁有ればなり。）

「何則」は、對策奏文等によく用いられる語である。そしてこの語は、單なる語の位置を超えて、文章の論理そのものを規制してゆく。右の例で言えば、「A何則B」の論理は、「B↓A」へと逆流する。王充はこのような表現を多

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

用する。⁽⁸⁾文章は無から出来はしない。人は、己の最も親しむ言葉を用いて文章を創りはじめる。王充は、二十代のほとんど全てを役人として過したものと、私は推測している。⁽⁹⁾彼は、同時代の政治的文章（自らも書く機会があったはずである）が獲得していた論理性⁽¹⁰⁾（その源は、戰國諸子百家の修得していた論理性に見出だされる）を用いて、己の論理を築いていた。

「章」とは、このような論理展開の痕跡、即ち「句」の上に位置する「場」である。

王充は次に、「章」と「篇」の媒介として、「體」なる語を用いている（章有體以成篇）。「文字—句—章—篇」の四つの「場」がある。四つの「場」は、その質を異にし、各々一段ずつ高度になってゆく。そして、一段高度な「場」に昇る爲には、各々別の契機（比喩的に言えば、はしご）が必要である。契機としての「意—數—體」。この異種の契機の考え方は、王充の創見であるが、今なお學ぶべきものがある。 「文心雕龍」章句篇では、ただ「人之立言、因字而立句、積句而成章、積章而成篇」（人の言を立つるや、

字に因^よりて句を立て、句を積みて章を成し、章を積みて篇を成す」としか述べていないから、劉勰もなお、その重要性に氣づかなかつたものと思われる。

三つの契機の中では、「體」が最もわかりにくい。論理の方向は「章」で定められよう。しかし、この場合もやはり、「章」を増すのみでは「篇」とはならない。論理の無限増殖の彼方には文章は無い。そこに「體」が必要である。「體」は「からだ・本體」である。¹⁰⁹「章」はからだの一部分にすぎない。「章」が備わる、すなわち、各章がある一定の方向に作用する（體を成す）。かくて、「篇」が完成する。「體」は一篇の文章の最終的な完成に與^{あづか}る概念である。「體」について更に考える前に、王充の「論理」とは何かを見ておかねばならない。一口で言えば、それは「偶然」である。「偶然」が全てを支配する。これでは、未だ完全には論理をなさぬ段階、論理の前段階に止まるであらう。しかしながら、この「偶然」という「論理」は、王充の言葉使用にある無視出來ぬ傾向をもたらず。

例えば、王充は「或」の語をよく用いる。これは、ある

命題が成り立つことの偶然性を示す。¹¹³ また王充は、「未必」の語をもよく用いる。これは、必然性を否定することによって、偶然性を言わんとする。

處尊居顯、未必賢、遇也、位卑在下、未必愚、不遇也、
（逢遇篇）

（高く陽の當る位に居るからといって、賢人だとは限らない。恵まれていただけだ。低く賤しい位に居るからといって、愚か者だとは限らない。恵まれていないだけだ。）

人間の「である」と「となる」との間には、必然的な關係が成立しない。「賢である」からといって、「高官となる」とは限らぬと言うのだ。やはりよく使われる語「或時」についても同様である。もちろん、これらの語（或・未必・或時など）は、漢代に通用した語であるが、それを「論衡」の中で常套語として使ったのは、ひとえに王充の個性による。これらの常套語は、文表現の面から言えば、對偶表現と密接に結びつきつつ、同時に對偶を交錯させ、對偶表現の單調さに屈折を加える役割を果している。それはまた、人生の屈折の反映でもある。

以上まとめれば、「論衡」の文體は、對偶を基本型として、漢代の政治的文書の持つ論理性を受け入れることにより自らの論理を展開せしめ、且つ偶然性表示の語彙を導入して、その展開に屈曲と與行きとを賦與している。少なくとも、まずこのような文體が投げ出された。

「論衡」に類出するいま一つの文體上の工夫「或(難)曰」は、無形篇第七に於て初出する。無形篇では、まず「形不可變化、命不可減増」(形は變化す可からず、命は減増す可からず)と結論を出した上で、「或難曰」と反論を提出する。反論と雖もやはり王充自身の言葉使い(文體)である。「或難曰」は、自己の發言を相對化し、自己のものではない思惟方法を己の文體の内部にとりこむ所の、いわば裝置である。この反論に對しては、王充の側からの更なる「反論」⁴⁴「曰」が對置される。そして、この反・反論部が無形篇の大部分を占める。反・反論部の文體は、(1)經書(ここでは「體」を引用し、(2)「何則」「由此言之」「以何驗之」等の論理に係わる語を用いる點で、漢代の對策奏文に著しく似る。ここでも「論衡」の論理性の出處が確められよう。⁴⁵

「論衡」に於ける意・數・體(小池)

私は、この反・反論部が「體」に相當するのではないかと考える。王充はここで、結論を求めたのではなく、既に示されている結論を論證しようとした。その背後には、論證されうるもの、論證されたもののみが眞に實體を持つとの王充の信念が在る。

證明の他の一方法は、例えば吉驗篇第九に見られるように、「例證」である。その例證は餘りにも多く、むしろくどいと言つても過言ではなからうが、これに關しては、狩野直喜の「一體漢の文人の文には、動もすれば此の種の缺典あり」との注釋がある。⁴⁶ もっとも、王充の場合は單なる時代の惡弊には止まらない。例證多ければ多い程、そのもの(例證されるもの)の實體性が堅固になる、王充はそう信じている。この例證の部分がやはり「體」に當たる。

語増篇第二十五に、

凡天下之事、不可増損、考察前後、效驗自列、自列則是非之實有所定矣、

(世の中の事はみな、勝手に増減すべきではない。前後を考察すれば、證據が自然と並ぶ。證據が自然と並べば、何が正

しいか誤りかが定まるものだ。）

とあるが、この「考察前後」を「數」、「效驗自列」を「體」と見なすことが許されよう。論理に實體が備わって「篇」が成る。すなわち、「是非の實」が定まるのである。^{m)}

以上見てきた四つの場「文字・句・章・篇」及び三つの契機「意・數・體」によって織りなされる文章構造は、「論衡」全篇に亘って基本的に維持される。そしてこの基底に於ける不變性が、「論衡」の文章の柔軟な變容を保證している。

「文字」―「句」―「數」―「章」―「體」―「篇」の考え方は、これで完結した文章論ではあるが、実際には「篇」の上に更に「書」（書物。例えば「論衡」という書物）が来るはずである。正説篇にも「夫經之有篇也、猶有章句」（それ經の篇有るや、猶お章句有るがごとし）としてある。ところが王充は「篇」と「書」とをつなぐ契機については何も述べていない。「篇章の連結」ということに重要な意味を認めた彼が、そこに何の契機をも書き記していないのは、恐らく新たな契機の必要性を認めなかったのである。「篇」を連結して

ゆけば、そのまま「書（物）」となる。

しかし、果して何の契機もなしに、「篇」↓「書」という「場」の質的轉換が可能であろうか。私は、その時に、「篇」を形成する場合と同一か、或いは相似の、創造の型が認められるのではないかと推量する。いま「論衡」に即して言えば、「意↓數↓體」の契機が、何らかの形で「論衡」全體の構成に作用を及ぼしてはいないだろうか。この問題意識を持ちつつ、「論衡」の文章を編次の順に読み直して行こうと思う。

二 「意」

「論衡」初期數篇の文章は、王充第一回隱棲後、三十二、三歳頃に書かれている。¹⁰⁾（同じ時期に「諷俗節義」と「政務」を書いた。）この時期の文章からは、官を辭して間もない頃の王充の、不遇な自分自身への、そしてまた己を不遇に追いやった「俗人」への憤りが読み取れる。例えば、

凡人操行、不能慎擇友、友同心恩篤、異心疏薄、疏薄怨恨、毀傷其行、（果害篇）

（人の素行をみれば、慎重に友人を選ぶことなど出来そうもない。友人というのは、心が同じ時はなさけも深い、心が違つてしまうと疎遠になる。疎遠になれば怨みを抱き、かつての友人の行いを誹謗し妨害する。）

「譏俗節義」も同じような氣持で書かれたであろう。自紀篇にこう言う。

充升擢在位之時、衆人蟻附、廢退寓居、舊故叛去、志（誌）俗人之寡恩、故閑居作譏俗節義十二篇、

（充が擧げ用いられ、官位についていた時には、多くの輩が蟻のように集ってきたが、一旦退けられて家にひきこもると、舊知の者も裏切り離れていってしまった。俗人には恩を感じる心が少ないことが身に染みてわかったので、閑居して譏俗節義十二篇を作った。）

右二文、王充の孤立してゆく姿が自ずと現われている。王充の憤りは、己の孤立化の裏がえしでもあった。王充はここで、自らの不遇を、自らの責任として内省するのではなく、他人（世俗）の責任に轉化して憤る。私は、彼の先祖が（父の誦を含めて）任俠の氣風を有したことを思い起こす。

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

ただ、王充の時代はもはや任俠精神の生きうべき時ではなかった。一步退いて内にひきこもり、「書く」という行爲によつて「世俗」と闘わんとするその姿に、私は、内向せる任俠精神を見る。

宋の黃震は、王充についていみじくも「其初心發於怨憤」（その初心は怨憤に發す）と斷じている。

しかるに憤怨は憤怨でしかない。それを、つまりある一つの感情を、文體にまで高める爲には、別の何かが要る。

「論衡」では、それは論理である。憤怨は論理の形をとる。論理と感情との關係を、大岡昇平はこう説いている。

論理で割切れないところを、むりに論理にあてはめる。それが一つの感覺を生み出す。讀む時の印象として爽快感を伴う。しかしながら作者のほうからその論理が出るのには感情的な要因がある。

その論理が、既に述べた如く「偶然」であり、それは「皆有命也」（命祿篇）という運命論として體系化される。人間の眼に「偶然」と映つたものは、實は「命」の發動であつた。

これらの「憤怒」を主要な動機とする初期數篇を、私は、契機としての「意」と重ね合わせてみたい。創造活動の始源に於ける感情的な要因とでも名づけるべきものが、兩者に共通して見受けられる。「論衡」はまず「意」を內力的力として動きはじめる。²⁴⁾

ここで見落せないのは、先に指摘した「論衡」の文體は、この初期數篇に於て短期の中に築き上げられ、ほぼ完璧な姿をとるに至っていることである。緊張感に満ちた文體がそこに在る。

三 「數」

王充が、己の情念を論理として定着させ得たのは、無形篇第七に於てである。そのすぐ前の命義篇は、

故人之在世、有吉凶之命、有盛衰之禍福、重以遭遇幸偶之逢、獲從生死而卒其善惡之行、得其胸中之志、希矣、

(だから人がこの世に在る以上は、吉凶の運命があり、盛衰を経験し、更に幸不幸に出遇うことになる。壽命を全うし、

善きにつけ惡しきにつけ自らの仕事をなし終えて、胸中の志を實現し得る者は、めったに居ないものだ。)

で終っている。當初の憤怒は、ここに一應の鎮靜を見たかの如くである。これは、續く無形篇で論理を獲得しえたことと無關係ではないであろう。情念を納得させ、それにとつて代るに足る論理の力が準備されていた。²⁵⁾その力を保證するのが、無形篇の「體」部(反・反論部)である(既述)。

「體」部に於て實體化された論理は、王充に「人、物也」という言葉を發せしめるが、この言葉は、以後「論衡」の要所要所で反復されることになる。

無形篇は、ただし、なお自己主張に急である。反・反論に對する反論Ⅱ反・反反論は行なわれない。章學誠が「問難之體、必屈問而申答」(問難の體は、必ず問ふに屈にして答ふるに申なり)と指摘するのもうなすけよう。²⁶⁾このことは、反・反論部に疑問形(或いは反語形)の結句が多いこととながるであろう。²⁷⁾情念の餘火の爲せる業であらうか。

偶會篇第十では、「命」が「自然」であり、「他の爲すところに非ざる」ことを證する。天人相關説に強く支配さ

れていた當時の「世」論が批判の對象となつた。「虚妄を疾む」(佚文篇)の一言は、ここに至つて始めて正當に「論衡」を斷ずるであらう。「論衡」は情より批判へと移行してゆく。

初稟篇第十二は、「儒者」の天人相關説を論駁するが、批判の方法は無形篇に比して、より周到になっている。その論駁は次の形をとる。

儒者論之↓如實論之(王充)↓或曰(儒者)↓難曰(王充)

このような、論理を盡した批判を、契機としての「數」の書物全體の中での現われと見ることができよう。つまり、「論衡」の全體が「意」(情)より「數」(批判)へという構造的變化を遂げたのである。

かく考えると、書虚篇第十六以下九虚三増の諸篇が續くのは、決して偶然ではないことになる。「九」「三」という「數」。論理は數を重ねるに従つて、いやしくもそれが論理である以上、必ずより明確になつてくる。ここに、いっそう明らかに「數」が出現しているのが認められる。

九虚三増の諸篇では、もはや、己(作者)をおびやかすも

「論衡」に於ける意・數・體(小池)

のは影を潛めている。王充は、世界に於ける己の位置を見すえおえて、「他」の攻撃に移る。しかし、皮肉なことに、この時、かつて死活の意味を持っていた「論理的文體」は後退する。己自身が己のよつて立つ所を疑うという文體上の裝置は、全く消滅するわけではないにしても、ほとんどその存在を感じさせなくなっている。その例として、雷虚篇第二十三の一文を引いてみよう。

實説、雷者太陽之激氣也、何以明之、正月陽動、故正月始雷、五月陽盛、故五月雷迅、秋冬陽衰、故秋冬雷潛、盛夏之時、太陽用事、陰氣乘之、陰陽分爭*、則校軫、校軫則激射、激射爲毒、中人輒死、中木木折、中屋屋壞、人在木下屋間、偶中而死矣、

*「爭」の字、明刊本「事」に作る。今、宋刊本に従う。

(實際は、雷は陽氣が激しく運動したものである。何によつてこれを明らかにするか。正月には陽氣が動く。だから正月に始めて雷がおこる。五月には陽氣が盛んになる。だから五月には雷がはげしい。秋と冬には陽氣が衰える。だから秋と

冬には雷はひそんでいる。盛夏の頃は、活發になった陽氣が萬事を支配し、陰氣がそれにつけこむ。陰陽が分立して争うと、兩者は交わり巡る。交わり巡ると、激しく飛び出す。激しく飛び出すと毒となり、人に當れば死に、木に當れば木が折れ、家屋に當れば家屋が壊れる。人が木の下や家屋の中に居て、たまたま當ると、死んでしまう。

王充の文體を特徴づける表現は「何以明之」を除いて無く、對偶型も變則的に見られるにすぎない。代つて目立つのが繰返し表現である。これは、「物」の運動を追うに適した文章である。「論理」として文體の内に實體化されている感情は、前もって排除されている。王充は、天と人(己)との位置を定めおえた上で、兩者の中間に浮游する「物」の本質規定を試みた。それらは「位置」を占めるのではなく、「自己運動」であることを證すべき時なのである。

語増・儒増篇になると、誇張を批判しつつ、王充は知らず識らず自己を語りはじめている。まさしく「文不對處、意却著對」(文が目ざしていない所に、かえって意があらわれる)である。私は、ここに「論衡」全體の中での「體」の兆し

を見る。「意」から「數」を経て「體」へ。一篇の内部での「體」は、「論證、例證」の部分に當るが、「論衡」という「書物」の中では、文章が有する内的論理の枠組みを、文章自體が超えてゆく、その超えた所から「體」が始まるのではないか。そしてそこに作者の正體が現われるのではないだろうか。例を挙げよう。

夫易則少憂、少憂則不愁、不愁則身體不羸、(語増篇)

(やさしければ苦しみは少なく、苦しみが少なければ心悩むことがない。心悩まなければ、身體はやつれない。)

仲舒雖精、亦時解(懈)休、解休之間、猶宜游於門庭之側、則能至門庭、何嫌不窺園菜、(儒増篇)

(董仲舒は讀書に専念していたとはいえ、また時にはくつろぎもしただろう。くつろぎの時には、門庭のある方へも遊びに行ったことであろう。門庭まで行ったとすれば、どうして菜園をのぞき見ないことがあろうか。)

二例とも繰返し表現を用いるのは、九虛諸篇の文體の影響とも考えられる。それはさておき、これらの記事は直接的には自己を語ったものではないが、しかし「論衡」の執筆

にうち込む王充の日常を彷彿させる。特に後者は、陶淵明「歸去來兮辭」の一句「園日涉以成趣」（園は日々に涉りて以て趣を成す）を連想させずにはいない。

もっとも、三増諸篇ではこのような「體」の萌芽と思われる表現は、斷片的に姿を見せるだけであり、基調はやはり批判（數）にある。

談天篇第三十一になると、「天地」間の神祕的なもの、非合理的なものは全て虚妄として退けられる。人間の想像に成る世界は一切虚妄であると王充は考える。想像の世界は想像の世界として、一つの實體なのであるが。ここに王充の文章の缺點を見ることが出来る。想像力を飛翔させることによって獲得される擴がりをそれは缺く。一切の餘分なものを排除したあとの「天地」は、どこか空虚である。その空虚さは、王充が想定する所の、世界と人間の關係に相似に見える。

答佞篇第三十三以下は、既に天地の諸相については論じ盡したので、人の諸相を説く。狀留篇第四十までの諸篇で展開される人物批評は、王充自身の生き方の探究と重なり

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

あう。それは、「命」の束縛から免れんが爲の思索であると言うこともできる。

まず「文吏」（官僚）に對して「儒生」（學者）が擁護されるが、やがて謝短篇第三十六で「文吏」と「儒生」が相對化される。「儒生」にも短所のあることが認められた。效力篇第三十七では「儒生」に「力」の概念を導入して、「文儒」が生み出された。「文儒」は、博く學問に通じるとともに、創作能力を所持した人間である。次の別通篇第三十八では「通人」を説く。「文儒」の博學の方向を更に延長した。人はその知識によって、物から辨別される。單に情欲に翻弄されるのみでは、人は物に等しい（人、物也）。人は學び知ることによつてはじめて、情欲を抑制し、人間の本性（五常の性）を發現できる。「通人」の貴い所以である。かく見ると、「人、物也」という唯物論（無形篇第七に初出）は、人間各人に自らが人となる責任を負わせるという、きびしい倫理性に支えられていることがわかる。

「論衡」のこれ以前の諸篇は、その著作時期を詳かにする決め手を缺くが、別通篇に及んでその推定が可能となる。

「孝明」「今朝」を區別して記してある所から、この篇は章帝の時代に入ってから書かれたと判斷されるのである。永平十八年、王充四十九歳以後である。

さて超奇篇第三十九で、「鴻儒」(創造者)が人間の最高の在り方として規定される。王充、もちろん「鴻儒」の意氣である。このような「文章之人」は漢王朝の榮える證しであるから、當然お上に召されるべきである。こう明言してはばからぬ王充は、もはや精神的に隱遁者ではない。

文有深旨巨略、君臣治術、身不得行、口不能繼(泄)、表著情心、以明己之必能爲之也、(超奇篇)

(文章によって深い内容と大きな企みを示し、君臣の政治の仕方について述べるのは、實行力もなく、演説も出来ない人間が、自分ならきつとこんな風に出来るんだが、という心内をうち明けたものである。)

「文」は「言・行」に拮抗し得るといふ信念に於て、王充は深く政治にかかわってきた。その時、文章は「華やか」で「美しい」ものでなければならぬ、とされた。

華葉之言、安得不繁、(超奇篇)

(華葉の言、安くんぞ繁からざるを得ん。)

文不美潤、不指所謂、(同)

(文美潤ならざれば、謂う所を指さず。)

狀留篇第四十は、賢儒の不遇に借りて、己の不遇を嘆く。批判精神からはもはや遠く離れている。

私は無形篇からこの篇までを、「論衡」に於ける「數」(正確には、「數」を創造のエネルギーとする諸篇の意である。)と見なしたい。「數」の部分は、「意」で形成された文體を輕度にししか繼承せず、批判をその主題としている。しかし批判の對象が「物」から人間に及ぶにつれ、「作者」の姿が徐々に現われはじめた。

四 「體」

寒溫篇第四十一は、人事を離れて再び天を説く。天地の變動は、全て氣の動きによるのであり、人爲の招くものではない。これは既に王充の説いた所である。何故にここで、それをわざわざ強調しなければならなかったのであろうか。その動機は極めて政治的なところに在る。章帝即位のはじ

め、天地に異變が續いた。この國家の危機に際して、災難は政治が招いたものどとして、章帝を諷するものが現われた。(それは特に讖緯說に理論的根據を置くものが多い) 例えば、恢國篇に、

隱疆侯傳、縣(懸)書市里、誹謗聖政、

(隱疆侯傳は、街中や村里に文書を張りめぐらせ、聖政を誹謗した。)

と記す。時に王充五十歳。王充は章帝を辯護せんが爲に寒溫篇を書いたのである。内部に醸されてきた批判精神は、いま外に向つて發現し、現實性を獲得しようとする。

この寒溫篇の言葉使いは、初期諸篇に形成された王充の文體に復歸した感がある。「或曰」「何則」「未必」等の、王充の文體の節目となる語がしきりに用いられ、文體的な緊張度の高まりが読み手に傳わってくる。そこには、王充の切迫した危機感がある。章帝即位の當初彼の抱いた甘い期待に比して、現實の舞臺ははるかにきびしい局面を迎えていた。王充の文體は、初期諸篇に於て既にそうであつたが、自己に襲いかかってきた危機に對する防御作用なので

「論衡」に於ける意・數・體(小池)

ある。それを、一種の身構えと見ることもできよう。(なお、この篇は對偶は少ないが、これは、一度「數」の諸篇を経る過程で、對偶が大幅に減少したことに主な原因がある。新たな對偶はまだ必要とされていない。)

寒溫篇で再出した文體的緊張は、以後十數篇を通じて持續する。それは精神的緊張の續く期間である。私は、この時期こそが「體」に相當するものと考え。なぜならば、ここで「疾虛妄」という「論衡」本來の目的を逸脱して、作者王充が己の正體を無意識のうちにさらけ出しているのだから。

寒溫篇から明零篇第四十五までは、主として「天」と「人」の關係(天人相關説の否定)を説くが、續く順鼓篇から商蟲篇第四十九までは、主として「物」と「人」との關係を論じる。「物」は人間の實踐の對象である。事は政策論の形をとった。政策に論理は無用である。論理は後退して、代つて再び時命論が強調されてくる。

時當自然、不宜改政、(明零篇)

(時勢は自然に決まるものだから、政治を改めるのはよくな

い。）

これは他でもなく、時命論によって、章帝（また第五倫）を擁護しているのである。災異を眼前にして、人君たるもの、ただ「時を俟つ」（順鼓篇）べきである。政治變革を迫る神祕思想家（王充は變復家と呼ぶ）に屈してはならぬ。この時、王充の立場は荀子のそれに等しい。

講瑞・指瑞・是應の三篇では、當世には章帝という聖人が出現しているから、瑞物も必ず出現するはずだという確信を述べる。（王充は豫兆を信じる。）

治期篇第五十三は、國家の安危は時命によって決まるのであり、人力ではどうしようもないことを述べる。（「論衡」初期に見られた時命論は、主として個人の運命に關するものであった。）そこに次のように言う。

危亂之變至、論者以責人君、歸罪於爲政不得其道、人君受以自責、愁神苦思、撼動形體、而危亂之變、終不滅除、空憤人君之心、使明知之主虛受之責、世論傳稱、使之然也、

（危亂の異變が來ると、論議する者は人君を責め、政治が正

しく行なわれていないことに罪があると言う。人君はその言葉を眞に受けて自らを責め、思い悩み心苦しめ、身體をうち震わせるが、危亂の變は、終に滅りも無くなりもしない。無駄に人君の心を騒がせ、明智ある主君に、いたずらに責めを負わせることになるが、それは世論の壓力でそうさせてしまうのである。）

自紀篇第八十五に、これとよく似た表現がある。

閔人君之政、徒欲治人、不得其宜、不曉其務、愁精苦思、不睹所趣、故作政務之書、

（人君の政治がいたずらに民を治めんとするばかりで、適切な方法もなく、自らの任務もわきまえず、思いつめ心苦しめて、行く先のことも眼に入らないのを心配して、政務の書を作った。）

自紀篇では「人君」は前帝の明帝を指す。治期篇の「人君」は一般論として述べているが、實際は章帝を言うものと考えてよいであろう。問題は、治期篇の「愁神苦思」という言葉である。自紀篇「愁精苦思」の用例からみて、これは、表面的には「世論」を非難しつつ、暗に章帝への不満不安

を言うのではないだろうか。内に不安と批判があればこそ、逆に章帝擁護の強い姿勢をとったのではなからうか。

自然篇第五十四では、「無爲自然」を説くことにより、やはり章帝を辯護する。危機に際して「無爲自然」であれ、と言うのだ。王充が「論衡」全篇の中で、最も老子に近づいた時期である。そこに、こう言う。

説合於人事、不入於道、意従道不隨事、雖違儒家之説、合黃老之義也、⁽⁴⁰⁾

(説く所は人事と合致するが、道にまでは分け入らない。意圖する所は、道に従い、人事には順わぬというにある。儒家の説とは違ったとしても、黄老の主張する所とは合致する。) 私から見れば、王充は「従道不隨事」を意圖したが、その意圖の主體(すなわち王充)は、逆に「隨(人)事不従道」という路を歩みつつあるようである。言い換えれば、王充にあっては、「眞理」(道)を希求する意圖そのものが、「人事」の精神(すなわち「儒」の精神である)に發しているのだ。しかし、惜しむべきことに、「事」に泥んでは、竟に「道」は手にし得ぬだろう。それは王充の自戒した所である。指

「論衡」に於ける意・數・體(小池)

瑞篇に、「論事過情、使實不著」(事を論じるのに、感情的になり過ぎると、眞實をとり逃してしまふ)とある。が、己の認識の總體が、「人事」に左右させられていることには、彼は氣がつかつた。

この頃、王充は五十〜五十一歳。寒溫篇から感類篇第十五までの十數篇の他に、「備乏」「禁酒」の政論をも書いている。多作の時期である。⁽⁴¹⁾

齊世篇第五十六に入つて、今朝が讃美される。王充は、防御から攻撃に移つた。⁽⁴²⁾

宣漢篇第五十七では、現わるべき物瑞は未だ現われぬことが強調される(ということは、王充は物瑞の出現を待望しているのである)が、⁽⁴⁴⁾ 恢國篇第五十八⁽⁴³⁾に至つて、物瑞が堰を切つた如くに現われる。王充の期待は、今では現實であつた。建初五年、無妄氣⁽⁴⁵⁾至、歳之疾疫也、比旱不雨、牛死民流、可謂劇矣、皇帝敦德、俊義在官、第五司空、股肱國維、轉穀振贍、民不乏餓、天下慕德、雖危不亂、民饑於穀、飽於道德、身流在道、心回鄉(郷)内、以故道路無盜賊之跡、深幽迴絕、無劫奪之姦、以危爲寧、以

困爲通、

(建初初年に無妄の氣が襲ってきたが、それは歲が疫病にかかったのである。日照りが續き雨が降らず、牛は死に民衆は流亡した。まったくひどいことであったが、皇帝(章帝)は德を厚くせられ、賢明で忠實な人物が官位につき、第五(倫)司空が國家の大本を補佐して、穀物を轉送し救援物資をふるまったので、民衆は困窮饑餓することがなかった。天下の人は德を慕い、危機ではあったが亂れることはなく、民衆は穀物には饑えていたが、道徳に満ち足り、身は流亡して路傍に在っても、心は内(宮中)を向いていた。それで道路には盜賊の姿は見えず、どんなに奥深い僻地でも、おいはぎの害がなかった。危機を變じて平和とし、行きづまりを變じて見通しの立つようにしたのだ。)

ここには、危機を乗り越えた後の心の餘裕がある。章帝・第五倫はもはや擁護のではなく、讚美の對象となった。四言の重厚なリズム、對偶への氣配り、慎重な語の選擇など、修辭に意を凝した文章——これはまさしく王充が超奇篇に言う「華美」な文章ではないか。

須頌篇第六十では、王充は、漢帝國を一般的に讚美することから一步進んで、文章による今朝の讚美者(鴻筆の臣)たらんと欲する。田舎(會稽)に居ては何も出来ない。宮中(尙書)に召されて、今朝讚美の仕事に従いたいという願望が、あからさまに述べられている。「論」から「讚」へと向かう過程で、王充は現實の自己を見失いつつあった。⁴⁰⁾

「體」はここに極まる。

右齊世篇より須頌篇に至る五篇は、頌漢を主題とするが、文體の緊張度は急速に弱まる(注38グラフの12を見よ)。讚美はむしろ攻撃の姿勢であり、もはや防禦の身構えは不必要になったのである。このことは同時に、「體」(正體露呈)を持續させるエネルギーの消滅しつつあることをも暗示している。「體」は、その極まりに於て、既に己が終焉を豫知させている。

佚文篇第六十一で、「論」と「頌」との矛盾が次のような形で現われる。

*
夫人文章、豈徒調墨弄筆爲美麗之觀哉、載人之行、傳人之名也、善人願載、思勉爲善、邪人惡載、力自禁

裁、然則文人之筆、勸善懲惡也、

* 「夫」「章」は宋刊本による。明刊本は「夫」を「天」、「章」を「文」に作るが、意が通じにくい。

（文人の文章というのは、ただ墨筆をもてあそんで、見た眼に美しいものを創るだけではない。それは人の行動を記載し、人の名前を伝えるので、善人は載せてほしいと願い善行に勵む一方、悪人は載せられることを嫌い、自ら努めて身を慎むようになる。そうだとすると、文人の筆は、善を勧め惡をこらしめるものである。）

また、篇末に、

論衡篇以十數、亦一言也、曰、疾虛妄、

（論衡の篇は數十、これを一言で言え、^疾「虚妄を疾む」。）

文章の「美」と「善」、そして「眞」。「美」の強調された超奇篇の文章論と比べると、まず「美」の位置がずっと後退していることがわかる。これは恐らく、「體」の前に位置するか、後に位置するかの違いによって生じた差異である。これから政治に近づき、國家を讚美（實際には擁護することから始めねばならなかったが）せんとする人間にとって

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

必要なものは「美」であるが、一旦國家を擁護し、讚美しおえた精神が求めるものは「善」である。（王充の「文德」の論が、他でもなく佚文篇に見えることに注意されよ。）絶對的なものに對する身の證し立て。「美」から「善」への移行は、「體」を間に置くことによって理解できよう。問題なのは、「勸善懲惡」（善）と「疾虚妄」（眞）との落差である。王充は、まだここではそれを意識してはいない。すなわち、王充にとっては、「善なるものは眞」であり、「眞なるものは善」である。ここに彼の文章論の混亂があると同時に、人生觀上の誤認がある。それは後に、彼自身の生活の破綻として顯現しよう。

佚文篇篇末の「疾虚妄」は、王充が再び「論衡」本來の目的、「批判」へと回歸することを豫告する言葉である。「體」より「數」への回歸エネルギーが、眞善混同の誤解に起因するものであれ、ここに確かに生じたのである。

五 再び「數」

「數」への回歸は、論死篇第六十二に、「人、物也、物

亦物也、物死不爲鬼、人死何故獨能爲鬼」（人は物なり。物もまた物なり。物死すれども鬼とならず。人死して何故にか獨り能く鬼とならん。）と述べることに明らかなである。「人、物也」は、無形篇「數」のはじめに初出する言葉であつた。

死僞篇第六十三もやはり、「數」（批判）部に屬するが、注目すべきは、「致精誠、不顧物之僞眞」（眞心を盡せば、僞ものも本物になる）という考へに見えることである。「善」が「眞」を決定するという精神主義がそこにある。「誠」の概念（精誠・至誠・實誠）は、「體」の前の「數」（前期「數」と呼ぶ）部では、原則として否定的な意味で用いられた（誠を盡しても無益である）が、「體」の後の「數」（後期「數」と呼ぶ）部では、死僞篇のように、肯定的な、むしろ積極的な意味を有するようになる。前期「數」の「誠」と後期「數」の「誠」は、いわば體對稱の關係にある。⁴⁹「誠」の語義に變化がないとすれば、變つたのは王充の姿勢である。このような精神主義は、薄葬篇第六十七により一層明らかに出てゐる。

是故是非者、不從^{*}耳目、必開心意、墨議不以心而原物、苟信聞見、則雖效驗章明、猶爲失實、

* 明刊本、宋刊本ともに「徒」に作る。いま意を取つて字を「從」に改める。

（だから是非というものは、耳目には従わず、必ず心意を開いて定めるべきである。墨子の議論は、心によつて物を尋ねようとはしない。かりそめにも見聞をそのまま信じるならば、いくら效驗が明らかだといつても、やはり眞實を見失つてしまふ。）

ここで述べられている認識論は、「引物事以驗其言行」（物事を引いて以てその言行を驗す―自然篇）、「推類驗之」（類を推してこれを驗す―明雋篇）という、王充のこれまでの實證主義とは根本的に異なることを認めねばならない。これは、物事の判断の規準を「心意」に求める精神主義である。一度「體」を経た「數」は、精神主義的な装いをとりつつ、「批判」（疾虚妄）を行なう。

このような「批判」は、しかし、自らその鋒を鈍らせてゐる。例えば四諱篇第六十八では、俗信の全てを退けるこ

とはしない。王充に、人間相互の契約やしきたりの存在することが、つまり社會が見えてきたのである。

實説、世俗諱之、亦有緣也、⁽⁶¹⁾

(實際のところ、世俗がそれを忌みきらうのには、またそれなりの理由があるものだ。)

このものわかりのよさは、次の文章にも窺われる。

若夫曲俗微小之諱、衆多非一、咸勸人爲善、使人重慎、無鬼神之害、凶醜之禍、(四諱篇)

(世俗のごく些細な禁忌は、非常に多くてそれぞれ異なるが、皆、人に善をなすことを勧め、人を慎重にさせるものであり、鬼神の害や、惡黨の禍は伴わない。)

對象の多様性を認め、⁽⁶²⁾「善をなす」ものは承認しようという寛容さ。前期「數」部の俗信批判のきびしさは、もはやここにはない。(批判の對象が、俗儒の學說から世俗の通念に移ったこともその一因であろう。)⁽⁶³⁾そして王充のこの態度は、この前後の諸篇の文章を非力なものとしている。

解除篇第七十五は、おいのりとおはらいを排する。

不修其行而豐其祝、不敬其上而畏其鬼、身死禍至、歸

「論衡」に於ける意・數・體(小池)

之於祟、謂祟未得、得祟修祀、禍繁不止、歸之於祭、謂祭未敬、夫論解除、解除無益、論祭祀、祭祀無補、論巫祝、巫祝無力、竟在人不在鬼、在德不在祀、明矣哉、

(自らの行動に注意を拂わず、まじないに力を入れ、お上を敬わずに鬼神を畏れる。人が死んだり禍が襲ってきたりすると、これをたりのせいにし、たりの原因が分からないと言う。たりの原因が分かると、まつりをする。禍がしばしば起こって止まないと、これをまつりのせいにし、まつりの敬い方が足りぬと言う。おいのりとおはらいについて言えば、どちらも無益である。まつりについて言えば、それは何の足しにもならない。巫祝について言えば、それらは無力である。結局なにことも、決めるのは人であって鬼神ではなく、徳であってまつりではないことは、明らかではないか。)

「不敬其上而畏其鬼」——私はそこに、東晉慧遠の「沙門不敬王者論」の先驅を見る。王充は、鬼神・祭祀・解除のまかり通る世界が、章帝を頂點に戴く漢帝國の存立とは相容れぬものであることを見抜いていた。

右の文を見るに、嚴密な對偶を成している。「論衡」に於ては、嚴密な對偶は一般に精神の緊張の反映である。解除篇では緊張は、世俗に對してではなく（前述したように、王充は世俗に對してはむしろ寛容になっている）、章帝及び第五倫に向つて呼び起されているのではないか、と私は思う。「鬼神」の世界は、それほど深く漢帝國の中樞に入りこんでいた。⁶⁴

卜筮篇第七十一から解除篇に至る諸篇に於て、文章の緊張感が再びかなりの程度まで高まるのは、恐らく私が右に述べたことに起因するであらう。王充に見えてきたのは、彼が讚美し、期待を寄せてきた絶對的なもののあやうさであり、もろさであつた。

前期「數」の批判は、その後半に於て人物批評へと進んだが、後期「數」でも似たような動きが認められる。その俗信批判は、人間論へと發展する。王充の批判は、人間批判に分け入り、ひいては自己主張に向かう宿命にあるようだ。

人間論はまず認識論として始められる。實知篇七十八で

は、この世界には、經驗的に得られた知識（學問）によつては把握できぬ領域、ただ「心」を媒介にしてのみ到達しうる「性」の領域⁶⁵が在ることが論じられる。別通篇（前期「數」に屬す）では、人はその知識によつて物から辨別されることとが説かれていた。が、果して人は物から辨別されるだけでよいのか。王充の認識論は、より高次な（すなわちより倫理的な）人間の在り様⁶⁶を求めての、一つの摸索である。

續く知實篇は、人は生まれながらにして聖人であるのではなく、知的・道德的努力によつて後天的に聖人となる（聖人可勉成也）ことを言う。實知篇にせよ、知實篇にせよ、精神主義が實踐主義へと傾斜してゆく過程を示していると言えよう。

定賢篇第八十は、賢人をいかに見分けるかについて。

「賢人」として「聖人」としなかつたのは、それだけ現實的な生き方が求められたのである。王充は、様々な人物の批評を通して、生き方の諸型⁶⁷を、およそ政治・學問・文學の順に退けてゆく。その最後には自己批判とも見られる隱遁批判を述べている。

清其身而不輔其主、守其節而不勞其民、

(自分の身を清く保つだけで主君をたすけず、自分の節操を守るだけで民衆をいたわらない。)

生の型の順次否定は、自己の内部の様々な可能性を順に切り捨ててゆく作業である。かくて最後には何も残らない。

賢人は「型」ではないのだ。もし完璧を自認する者(無一非者)がいたとしても、それは偽善者(郷原之人)であるにすぎない。(逆に言えば、王充は一つの新しい生の型を提示しえなかったのである。)
「型」を捜しても無駄なのだ。

賢人は、しかも、市井にあつて何も目立つ所がない。それでは何を規準に判別すべきか。——「善心」によって。

「善心」はいかに見分けるか。

何以觀心、必以言、有善心則有善言、

(何によって心を觀るのか。必ず言葉による。善心があれば、

善言がある。)

「善言」によって。そしてまた、

心善則能辯然否、

(心が善ければ、是非を辨別することができる。)

「論衡」に於ける意・數・體(小池)

然否之義定、心善之效明、雖貧賤困窮、功不成而效不立、猶爲賢矣、

(是非の區別を定めることができれば、それは心が善い證據である。貧賤で困窮していても、功績があらがらず効果がなくとも、それでも「賢」と見なしてよい。)

「善であれば、眞を見分けられる。」王充の精神主義は、來たるべき所まで來た感がある。「夫和陰陽、當以道德至誠」(それ陰陽を和するは、當に道德至誠を以てすべし)とあるのも、それを裏づけよう。「至誠」(精神)は、自然をさえ動かしうると言うのである。

書解篇第八十二で、王充の自己限定は更に進む。その結果、己の可能性は狭まるが、その分だけ現實性は強められる。

「物以文爲表、人以文爲基」(物は文を以て表と爲し、人は文を以て基と爲す)。文が人を決定する。王充は、完成を目前にした「論衡」に日々自信を深めていったようである。「論衡」は「善言」に他ならず、「善言」は「善心」の證しなのである。しかし自信とともに不安も募ってくる。書解の「解」は、だから辯解の「解」でもある。辯解の一つに、

自らの意志に於て政治に對して無能力であることを擧げて
いる。王充にとっては、政治とは「人を無理にでも己に従
わせる」(使人必法己)ことである。しかるに、「善」は己
の心の問題であり、他人に強制すべきものではなかった。

六 回 歸

對作篇第八十四は、「史記」太史公自序にその形式を倣
い、著作の目的を述べる。そこに、「孟子」を引きつつ次
のように述べている。

孟子曰、予豈好辯哉、予不得已也、今吾不得已也、虛妄
顯於眞、實誠亂於僞、世人不悟、是非不定、紫朱雜廁、
瓦玉集糅、以情言之、豈吾心所能忍哉、

(孟子が言っている、「私はどうして辯論を好もうか。やむ
をえないのだ」と。いま私は「やむをえない」のである。虛
妄が眞實よりも幅をきかせ、實誠は虚偽に亂れているとい
うのに、世間の人々はそれに氣づかず、是非は定まらない。
紫(間色)と朱(正色)が混り合い、瓦礫と寶玉が雜り合っ
ている。私の氣持を言えは、とても耐えられたものではない

のだ。)

ここで始めて「吾」が出現した。「論衡」ではこれまで、
作者(吾)は一貫して文章の背後に隠れていて、表面には一
度も出てこなかった。⁸³ いかには作者の情がつき動かされよう
とも、それは「文體」の變化としてのみ表現されてきた。

「吾」はいわば「文體」という假面をかぶっていたのであ
る。(別の言い方をすれば、「論」の形式による制約を自らに課し
た作者が、己の姿をあくまでも隠し通さんとするその内面的營爲
が、「文體」の形で文章に逆作用したのである。)その「吾」が
ここに二度までも顔を出した。しかも「不得已也」「豈吾
心所能忍哉」という激しい情感の表出を伴って。かつて
「論事過情、使實不著」(指瑞篇)と批判した王充が、「以
情言之」とまで言う。これは、「情」、すなわち「論衡」初
期數篇の「意」への回歸以外の何ものでもない。後期「數」
の精神主義は、「心」を抽出することによって、最後には
「吾(心)」を現出させるに到ったのである。(巨視的にはま
た、「體↓後期數↓意」という回歸の全過程を、自己の正體露呈
↓「體」とすることもできようかと思う。)

對作篇はこの他、「論衡」の政治的有効性を強調する。

「九虛三増」の諸篇は「俗をして實誠を務めしむる」ものであり、「論死・訂鬼」篇は約葬・節儉に有益であるとされる。「論衡」の目的を、「俗を治める」とことと結びつけているが、これらの諸篇が書かれた動機は、もっと内發的なものであっただろう。

建初初年に政論「備乏」「禁酒」を書いたことを指摘するものも、この篇に於てである。これも、自らの政治的實績を誇示せんとしたものであらう。更に、王充三十歳半ばの作とみられる「政務」についても、

政務爲郡國守相、縣邑令長、陳通政事所當尙務、欲令全民立化、奉稱國恩、

（「政務」は郡國の長官宰相、縣邑の長官達の爲に、努めて行ふべき政策について列舉し、民衆を保護し教化を確立し、國恩を稱讃させようとしたものである。）

と自讃する。ただし「政務」については、自紀篇で、時の君主（明帝）の政治姿勢に不安を抱いたので作つたと明言している（14頁を見よ）。自紀篇に言う所が王充の本心だと考

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

えられるから、對作篇の表現は、「お上」の眼を意識して、無難なように曲げて書いたのである。そして、これをも己の實績の一つとした。王充の再仕官への望みは強まる一方である。

論衡實事疾妄、齊世宣漢恢國驗符、盛褒（須）頌之言、無誹謗之辭、造作如此、可以免於罪矣、

（論衡は事實を正し、虛妄を批判したものであるが、齊世・宣漢・恢國・驗符の諸篇は、國家讚美の言葉に満ち、誹謗の言葉は無い。このように造つてあるので、きっと罪を免れることができる。）

はつきりと「お上」の方を向いた文章。「可以免於罪」とは、まさしく「政治」への拜跪ではないか。確かに「論衡」の文章は、「意」に始まり「意」に回歸することで終らんとするが、回歸を果した時には、「吾」は「論衡」を書きはじめた頃の作者とは別の相貌をしてそこに居た。

「論衡」は王充をそこへ導いたのである。ここに陷穽が在った。王充は、自己の願望した自己と、現實の（存在として）自己とを同一化し、自己の願望した自己をあたかも現

實の自己であるかのように錯覺した。所詮、彼は僻地の一無名隱士にすぎなかったのであるが。

かくて「論衡」八十四篇、ひとまずここに稿成った。建初七年（王充五十六歲）前後のことと推量される。

自紀篇第八十五と、對作篇との間には數年の時の経過がある。その間に王充は、辟召・再仕官（楊州從事）・辭職隱居を経験した。篇の形式は「史記」太史公自序、また班固の「漢書」敘傳を襲う。自紀篇は、我々に貴重な傳記的資料を提供するが、同時に「論衡」の終篇としてのそれ自身の意味が問われねばならない。

まず自己の來歴が語られる。が、自傳の常として、ありのままの過去が再現されるわけではない。取捨選擇を加え、自己を一本の線上に再構成しつつ、作者（王充）は語るのである。現に生きた時の眞情のある部分は忘却される。例えば、「位不進、亦不懷恨」（位は進まされども、また恨みを懷かず）。

王充は、自己の過去を再構成するに、自らの運命論でも

つてした。それは、外見的には受動的な處世であり、したがって否定形で書かれる場合が多い。例えば、「不貪進以自明、不惡退以怨人」（進むを貪りて以て自ら明らかにせず、退くを惡みて以て人を怨まず）。或いは老莊の「無爲」に似る（宥性恬澹）。與えられた「命」の下で「清」を生きたものとしての自己。王充はひとたび挫折し、挫折を経て初期の運命論に復歸し、己の理想化を試みた。

けれどもこうも言える。理想化は、政治に係わり、俗に交わって生きてきた現實の自己を捨象することにより成り立っている。つまり、彼は、（後）漢という體制から離脱した所、俗世間とは係わってゆかね所に、魂の平安を求めた。王充晩年の心境である。

歸之於命、委之於時、浩然恬忽、無所怨尤、

（全てを命だとあきらめ、時のなすままに任せる。廣々とし
た氣持で、何ものにもとらわれず、恨み責める相手もない。）
心境としてはむしろ老莊に近い。我々はそこに六朝的なもの
のさえ見ることができよう。

次に「論衡」初稿（對作篇までのもの）に對する諸批判へ、

の反論が展開される。「論衡」に對する批判は、當時から既に、思想の面からするものと同時に、文章の面からするものが多かった。それで、反論は自ずと文章論になつてゐる。その中の主な點のみを擧げてみよう。

その一。「眞實」はもはや「美」ではない。

論貴是而不務華、

(論は是を貴びて、華を務めず。)

充書不能純美、

(充の書は純美なること能はず。)

眞實の爲に華美は棄て去られた。これは、王充が「國家」(政治)を棄てたことである。また、「善」が殆んど目立たないが、もはや説明の要はあるまい。「美」を棄てた人間に、何の「善」があろうか。

その二。言語の地域性、歴史性への留意。その結果として、經傳を規範とするのではなく、現代(同時代)の口語を基礎とした文章を書くことが主張される。

右に述べた文章論の一と言ひ、二と言ひ、王充が批判精神を取り戻していることを示している。本稿に則して言え

「論衡」に於ける意・數・體(小池)

ば、前期「數」への接近を感じさせる。ただし、自紀篇の全體は、自傳という性格から見ても、また感情が運命論の背後に潛んでいる點から見ても、「意」を創造の動機として持っていると言ふべきであろう。その點では、自紀篇は對作篇の延長上にある。兩篇の「意」は、正と負ほどにも質を異にしているが、考えてみれば、正の方向が極端にまでつきつめられた結果、明確な負への反轉が(王充の意志とは無關係に)可能となつたのである。そして、自紀篇の「意」は、初期諸篇の「意」に重なるという意味に於て、ここに一つの圓環が完成した。

王充の思考は今すこし續く。それを自紀篇の文章に沿つて分析してゆこう。

(1) 對偶體と散文體の合一。「論衡」の全體を通觀するに、對偶體は必ずしも優勢だとは言えないが、自紀篇に至つて、四・六言リズム主流の、嚴密な對偶が、規則的に散文體を伴いつつ出現する。一例のみ引く。(……線が對偶部)

垂棘與瓦同積、明月與礫同囊、苟有二寶之質、不害爲世所同、

（垂棘〔美玉〕が瓦と同じ箱に入れられ、明月〔美珠〕が石ころと同じ袋に入れられたとする。各々自分の寶石としての性質さえ保っておれば、世間からがらくた扱いされても、氣にはならないものだ。）

對偶部はこの例のように、比喻を成すものが多い。（命論の影響下にある對偶もある。）散文部は結論を述べる。もちろん、突然にこのような文體が発見されたわけではなく、本來「論衡」の中に分散して、或いは局部的に含まれていた文體が、ここに凝縮されたのである。ただし、それは王充の本來の文體とはもはや似ない。今までとは別種の内的緊張を受け止めるべく、「型」の整合が求められていた。「物」や「實」は今度は直接の對象にはならない。そうではなくて、何か新しい「生の型」の創出による閉塞せる現狀の打開。それに適した文體。そのようなものを希求しつつ編み出された文體は、六朝美文の骨組みに著しく似る。

(2)「吾」の析出。「吾」が對策篇に於て始めて顔を出したことは前述した。自紀篇では、作者はまず「充」という三人稱體で呼稱される。ところが、途中で「吾」が現われ、

「充」と混同されるようになる。これは、右記(1)の文體の散文部から情が析出されたものである。

(3)四言主流の對偶型韻文。これは(1)の文體の對偶比喻部の獨立し、四言化したものと考えられる。この部分には「情」は含まれない。

(4)最後（時間的にいうと、王充の最晩年）に來るのは四言の詩である。(1)に未分化のままに含まれていた情と形式とは、一度(2)と(3)で別個に析出されて後、はじめて合一できたのである。情は形式を得、形式は魂を持った。詩の誕生である。ただし、晩年の孤獨と失意を述べる部分は、なお客觀描寫と感情表白の分離傾向が窺われる。

「論衡」をしめくくるのは、王充の絶筆とも見られる四言詩である。（△▲は押韻部）

惟人性命 これ人の性命には

長短有期△ 長短 期有り

人亦蟲物 人もまた蟲物にして

生死一時△ 生死は時を一にす

年歷但記 年歷は但だ記すのみ

孰使留之[▲]

孰かこれを留めしめん

猶入黃泉

猶しく黃泉に入り

消爲土灰[▲]

消えて土灰と爲る

上自黃唐

上は黃唐より

下臻秦漢而來[▲]

下は秦漢に臻るまで來

折衷以聖道

折衷するに聖道を以てし

枘理於通材[▲]

枘理するに通材に於てす

如衡之平

衡の平らかなるが如く

如鑑之開[▲]

鑑の開くが如し

幼老生死

幼老生死

古今罔不詳該[▲]

古今 詳該せざるは罔し

命以不延

命は以て延びず

吁嘆悲哉[▲]

吁嘆 悲しい哉

この詩はまず、漢代の「誄」の形式に従っている。四言隔句押韻、冒頭の「惟」、末句の「吁嘆悲哉」から、それは確められる。この詩はまた、後漢碑文の「碑辭」が、個人的な抒情を含み、抒情が四言句をうち破って五言句を生み始める、先驅となっている。

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

次にこの詩は、仔細に検討してみると、「論衡」全八十

四（自紀篇は除く）篇の中で用いられた言葉を多く用いている。特に多いのが、無形篇第七の表現である。

（自紀篇詩）

（無形篇）

惟人性命、長短有

人命短長、可得論也、

期、

人亦蟲物、

人、物也、

命以不延、

壽命不延、其何益哉、

しかもそれらは詩の冒頭と末尾で用いられている。これには何か意味があるはずである。かえりみれば、無形篇は、「王充が己の情念を論理として定着させ得た」（8頁）篇である。「意」より「數」への移行がそこでなされた。自紀篇末尾の詩で、その無形篇の、それも重要な意味を持つ言葉、詩の枠組みとして用いたということは、つまり、「論衡」は對作篇・自紀篇でひとたび「意」に回歸しながら、最後に再び、はっきりと「數」へと赴いたのである。圓環は閉じられることなく、循環に向った。循環を始めた精神にとって、未來は虛無である。

王充は、自ら「誄」辭を記すことによって、救いを後世に託したのである。

注

文中に引用した「論衡」本文は、明通津草堂刊本（四部叢刊初編所收）による。同時に、宮内廳書陵部圖書寮藏宋刊本（實知篇第七十八以下の本文を缺く）をも参照した。本稿では、前者を明刊本、後者を宋刊本と略稱する。

- (1) 最近の説では、例えば、「論衡注釋」（北京大學歷史系《論衡》注釋小組 中華書局一九七九年）前言に、「它的篇目次第却大致保存了王充整編后的面目」とある。私としては、佐藤匡玄「論衡の篇次について」（東方學第八輯 昭和二十九年のち「論衡の研究」創文社に收む）に力づけられた。そこに、「彼（王充）の意識主體に於ては、やはり時間的系列に於て、一つの統一があった」「今の編次に本づいて論衡を讀むことによって王充の思想の發展過程をば、歴史的に跡づけることも可能となる」とある。王充自らも、「篇句の次序」に殊の外留意している（佚文篇）。編次を含む「論衡」のテキストの問題については、別論しなければならないが、本稿はそれを直接の目的とはしない。逆に、本稿で述べる所が、文獻學上の問題に何らかの示唆を與え得れば幸いである。

- (2) 文字が單獨で傳達機能を有する場合がある。「水」『水が

欲しい』しかしこれらは、文章論では例外として排除してよい。

- (3) 超奇篇に、「心思爲謀、集扎爲文、情見於辭、意驗於言」とある。

- (4) 超奇篇に、「實誠在胸臆、（中略）文見而實露也」とある。なお、王充の文章論は、「誠」「胸中」「心思」などの表現から窺われるように、孟子の影響を受けている。

- (5) 例えば黄侃は「文之詞意完具者爲一句、結連數句爲一章」「文心雕龍札記」釋章句之名」と説明しているが、これは英語の sentence に當る。The Concise Oxford Dictionary の "Set of words complete in itself, containing subject & predicate & conveying a statement, question, or command." の説明がある。

- (6) 「呂氏春秋」壅塞篇に「世之直士、其寡不勝衆、數也」とあり、その高誘（後漢人）の注に、「數、道數也」と見える。

- (7) 渡邊照宏「インド哲學における『自然』の問題」（『思想』一九七六年一月號 岩波書店）に次の指摘があるのが参照される。「サーンキヤという語は『數』を意味する samkhyā という語の派生語で、プラクリティから展開される自然界の種々相を數えあげるといふ意味であると言われるが、サーンキヤは『理論・考察』という意味にも用いられ、『實踐』を意味するヨーガと對照される」。

「數」はまた、「易數」（王充は卜筮篇で「兆數」と呼ん

でいる」との関連をも考慮すべきであらう。

- (8) 他に目立つものとしては、「由此言之」「何以〇之」「夫如是」など。

- (9) 王充の傳記については、諸家なお一致せぬ所が多い。私は、自紀篇の「在縣位至掾功曹、在都尉府位亦掾功曹、在太守爲列掾五官功曹行事」が、王充の二十代に當ると考える。次に、王充の幼少期の傳記を略記しておく。會稽上虞の生まれ。幼少にして父を亡くし家は貧。十代後半に洛陽に遊學。二十歳頃歸郷。なお、役人時代の後半（二十代後半）は、時の會稽太守第五倫の下にあった可能性が大きい。

- (10) 「文心雕龍」奏啓篇に、「夫奏之爲筆、固以明允篤誠爲本、辨析疏通爲首」とある。また、陳柱は「中國散文史」（商務印書館 一九三七年）で、「兩漢之世、專欲爲文人者、惟辭賦家耳、若著散文者則以奏疏爲最工」（一四六頁）と述べている。

- (11) 文字は單語（漢字）の意義を實現する「場」である。

- (12) 後世の文學理論に於ける「體」との関連については別論する必要がある。『論衡』の中では、「王者一受命、内以爲性、外以爲體、體者、面輔（ほおね）骨法、生而稟之」（初稟篇）、また「人命稟於天、則有表候於體」（骨相篇）などに見えるのが参考になる。

- (13) 「墨子」小取篇に「或也者、不盡也」、同經篇上に「盡、莫不然也」の説明がある。「或」は、「必ずそうなるとは限

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

らない」の意である。

- (14) この點については、戰國諸子の文章の影響を考えるべきであらう。興膳宏「宮廷文人の登場―枚乘について―」に言う、「對話は諸子の書において、缺かすことのできぬ論理の枠組であった。」また、「頻用される對話形式は、（中略）それらの書の著者による假構された對話とでもいふべきもの」である。
〔文學〕一九七七年十一月號 岩波書店

前漢の揚雄はその著「法言」に於て、「或（問）曰」「曰」を、多過ぎる程多く用いている。王充は或いはこれにヒントを得たかも知れぬが、揚雄の方がずっと没個性的である。

- (15) 漢代の對策については、福井重雅「漢代における對策の書式―制度史による思想史研究への一視角―」（中國哲學史の展望と摸索）所收 創文社 昭和五十一年）が参考になる。それによると、「策に對える場合には必ず經義に立脚した意見を上呈するというのが要求された」。

- (16) 「支那文學史」（みすず書房）二五四頁。

- (17) 清・熊伯龍の「無何集」讀論衡法（中華書局一九七九年刊活字本による）に、直讀・横讀二法を説く。直讀とは、「每言一事、如剝蕉抽繭、其理層出不窮」、横讀とは、「觸類旁、……以類而推、莫可終窮」。また、「直推則就其文而讀之、横推則在乎人之自思」と言う。この直讀（直推）が「數」に對する讀み方、横讀（横推）が「體」に對する讀み方と見ることができよう。語増篇の「效驗自列」は、これを讀み手の立

場から言えば、「自思」の行爲である。

- (18) 超奇篇に、「能精思著文連結篇章者、爲鴻儒*、また「連結篇章、必大才智、鴻懿之俊也」とある。ただしこのことは、「論衡」が前もって準備された構成に従って書かれたことを物語るわけではない。謝承後漢書に「(王充) 見事而作」(藝文類聚卷五十八雜文部四筆引)と記すように、むしろ、その都度「連結」されていったと考える方が正しいであろう。なお、右記*印部を、山田勝美譯「論衡」中卷(新釋漢文大系69 明治書院)が、「思索を凝らして文章を作るのに、他の篇章をつなぎ合わせたりする者を鴻儒という。」と譯すのは従わない。「連結篇章」は、文字通りに受け取るべきである。

- (19) 「論衡」講瑞篇に「爲此論草於永平之初」とある。永平元年(五八)に王充三十二歳である。隱棲の時期についても各説一致せぬが、私は、「論衡」が書き始められる少し前と推定する。隱棲に入つたのは、彼の官界での不遇に第一の原因があるが、「而立」の年齢、光武帝の死(王充三十一歳の時)が直接のきっかけとなつたのではないかと考えられる。

- (20) 「政務」は永平三年に書かれた可能性がある。永平三年八月の詔に、「日月薄蝕、棼棼見天、水旱不節、稼穡不成、人無宿儲、下生愁墊、雖夙夜勤思、而智能不逮」(後漢書明帝紀)とあるのに對して、自紀篇に「閔人君之政、徒欲治人、不得其宜、不曉其務、愁精苦思、不睹所趣、故作政務之書」

と見える。「譏俗節義」「政務」ともに今は残らない。

- (21) 自紀篇に「世祖勇任氣、……至蒙(充の伯父)誦(充の父)滋甚」等と見える。

- (22) 「黃氏日抄」卷五十七讀諸子三論衡。なお、引用文の次に「持論至於過激、失理之平、正與自名論衡之意相背耳」とあって、黃震は怨憤を否定的にとらえている。

- (23) 中村明編「作家の文體」筑摩書房。

- (24) 王充自身は「意」と「情」とを區別して考えているが、「情」も「思」と同じく、「意」によつてはじめて表現される。また、「意・思」(心)と「情」とは胸中に於て互に作用を及ぼし合う故、いま「意・思・情」を含めて作者の氣持(感情)と呼んでおく。或いは「情意」と呼べばよいかも知れない。

ここで「論衡」の「論理」の役割の二重性について注意しておきたい。一篇の中では、「數」が論理である。ところが今、「論衡」初期諸篇にあっては、「意」が論理の形をとろうとする。

- (25) スピノザは言う、「精神が、すべての事物を必然的なものとして認識するばあい、そのばあいかぎって精神は感情を支配することのできるかなり大きな力をもっている。換言すれば、感情によつて働きかけられる度合いがかなり減少する。」(倫理學エティカ)第五部定理六 高桑純夫譯 河出書房)王充の必然は、「皆有命也」である。

(26) 「文史通義」内編三匡謬。

(27) その例「其何益哉」「其年安可增」「何謂人願之」「何可復更也」「安足以驗長壽乎」

(28) 書虛・變虛・異虛・惑虛・福虛・禍虛・龍虛・雷虛・道虛・語增・儒增・藝增の諸篇。「九虛三增」の言い方は、對作篇第八十四に見える。

(29) 「數」部に於ける一篇中の「句」は、對偶性を喪失する。したがって論理的語（「何則」「由此言之」など）も必要がなくなる。このような文體は、論理的文體というよりも、むしろ批判的文體と言うべきであろう。

(30) 宋・李塗「文章精義」五十六。

(31) 「嫌」「何嫌」については、「文史」第五輯（中華書局一九七八年）所收の裘錫圭著「論衡札記」に考證がある。それによると、「何嫌」は「不應懷疑的口氣」を表示し、「不可能」「怎麼會」の意にも使われる。

(32) 「論衡」には王充の日常を窺わせる資料は殆んど無い。謝承後漢書には「於宅内門戶墻柱各置筆硯簡牘、見事而作、著論衡八十五篇」（藝文類聚卷五十八雜文部四筆引）と載せる。

(33) この點に關して徐復觀はこう述べている。「他（王充）便只在象徵物的本身去著眼、而完全不從被象徵物的東西上去著眼；並由象徵物的破壞、以破壞被象徵物的東西；（中略）王充的這種態度、只能使歷史中的『人的世界』、趨於乾枯寂寞。」（『增訂兩漢思想史』卷二 學生書局 六〇五頁）

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

(34) 雷虛篇に「建初四年夏六月」の記事が見えるが、これは太平御覽卷十三引が「建武」とするのに従うべきだと思う。（建初四年は王充五十三歳、建武四年二歳）建初四年の項のみは、後に補筆された可能性もある。

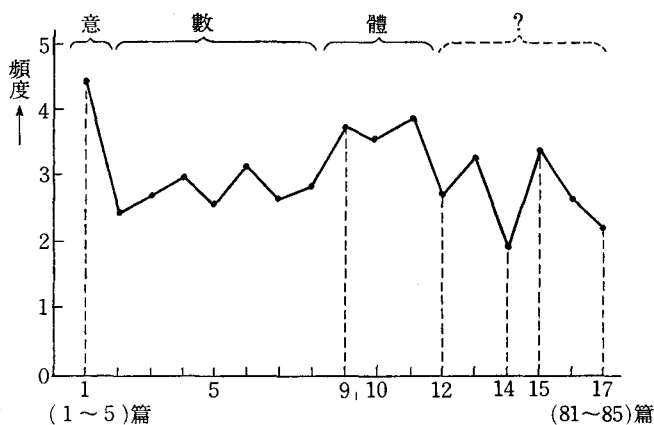
(35) 王充の心境が變化した背景には、外的な要因がある。王充は、章帝（永平十八年即位）及び時の司空第五倫（同年着任）に期待する所が大きかったのである。特に、第五倫の儒家流合理主義、反豪族の政治姿勢（後漢書卷四十一第五倫傳を見よ）は、王充に大きな影響を與えていたであろう。後漢書第五倫傳に「選孤貧志行之人以處曹任」とある。王充は若き役人時代に、會稽太守第五倫の庇護を受けていたことが十分考えられる。年齢的にも、王充は「知天命」にさしかかっていた。

(36) 劉盼遂は「文不美、指不潤、所謂……」とかなり無理な校定をしている（論衡集解）が、「漢書」董仲舒傳に「資質潤美」の表現が見えるし、四言リズムから考えても、本文を改める必要はない。意味も十分通じる。

(37) 袁宏「後漢紀」卷十一には次のようにある。「建初元年三月丙午、隱強侯博坐驕溢、……免爲庶人」

(38) 「論衡」の文體の緊張度を、いま、「論衡」の中でよく用いられ、かつ重要な意味を持つ語の使用頻度によって計ってみよう。選んだ語は「安能・安得・不能・時・或・或時・未必・或曰・夫猶・も也・何則・夫如是・何以○之・由此言之」。

これらの語の重要性については、本稿の一、二で述べたことを参照されたい。運命論に係わるものと論理を規定するものが多い。五篇を一単位として、左にそのグラフを示す。頻度1は、約二〇〇字の中で、一度、選定された語のどれか一つ



- が使用される確率のあることを示す。「意」の度数が最も高い。ここで文體が形成された。以下、「數」で相對的に緊張度が低くなるのに注意されよ。それが再び高まり、高まりが持續する。すなわち高原狀をなす所が「體」である。「體」以後の複雑な動きについては、後に觸れる。
- 對偶については、このグラフでは考慮していないが、若干のズレを含みつつ、ほぼ相似の曲線を描くものと考えられる。
- (39) 「荀子」天論篇に「上明而政平、則是雖並世起、無傷也」とある。「是」は天地の異變を指す)
- (40) 諸家「道意」で區切るが、それでは意が通じない。王充は「道」と「事」とを對にして用いる(例「事易知、道難論」本性篇)。ここは次のような對偶でなければならぬ。
- 意 從 道、不隨 事、

說 合於人事、不入於道、
- (41) このような多作期は、王充三十代の前半にも見られた。どちらも、精神的危機を迎えた時期である。王充は、書くことにより危機を乗り越えんとする。
- (42) この姿勢の變化の背景として、政治情勢の變化が考えられる。建初三年に入って、社會は上向きはじめる。
- (43) 宣漢篇と恢國篇の記事の間には、建初四年前後の一年有餘の空白期が認められる。建初四年は、ちょうど白虎觀會議の

催された年であるから、これと何らかの関係があることも考えられる。ただし、王充が會議に参加しなかったのは明らかである。(須頌篇参照)

(44) 物瑞(芝草・甘露・黄龍)の出現は、民衆が章帝を「聖」として認知した證しである。

(45) 「無妄氣」は、「易」无妄卦を典故とする。その卦辭に「其匪正有眚、不利有攸往」、また上九爻辭に「无妄行、有眚、无攸利」、「象曰、无妄之行、窮之災也」と見ゆ。王充の「不宜改政」「以俟其時」という主張は、「易」にその根據を持っていたのである。

補言すると、王充はその性情論及び文章論に於て、「易」(特に繫辭傳)から學ぶ所があったものと考えられる。

(46) 驗符篇第五十九は「皇帝聖明、招拔嚴穴也」で終っているが、これは建初五年二月の詔「其以嚴穴爲先、勿取浮華」(後漢書章帝紀)を受けた文である。王充の願望は、この詔によって觸發されたものであろう。

(47) ある對象を讚美しはじめた精神は、批判能力を失う。清・錢大昕は言う、「既己身蹈不韙、而宣漢恢國諸作、諛而無實、亦爲公正所嗤」(潛研堂文集)卷二十七跋論衡

(48) 論證の餘白はないが、私は、論死篇第六十二から訂鬼篇第六十五迄は、建初四年から五年の初め頃に、白虎觀會議を意識しつつ書かれたものと推測している。したがって、この四篇(論死・死僞・紀妖・訂鬼)は、宣漢篇と恢國篇の間に執

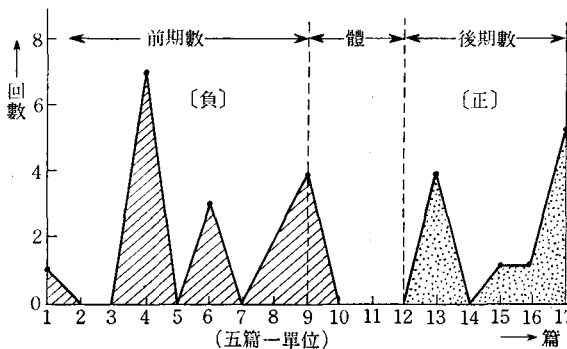
「論衡」に於ける意・數・體(小池)

筆されたことになる。

(49) 「〇誠」(精!至!實!)の出現回数を、グラフに示してみよう。(一部「至德」を含む。)正は肯定的、負は否定的用法である。負の中には、中立的な用法も若干含まれる。「體」は、正負逆轉に當つての、いわば中空状態である。

(50) 私は、例えば「廣辭苑」(第二版 岩波書店)が、「人間の精神力を決定的要因と考える立場」と説明するような意味に於て、「精神主義」の語を用いる。王充は「精神」(精氣)を「生のエネルギー」の意味で用いているが、今それとは關連しない。

(51) 龍虛篇第二十二にも「世俗之言、亦有緣也」とほぼ同じ表現があるが、そこでは否定的な意味で用いられている。(世俗は俗書を信じているということ。)この場合も、體、對稱の關



係が成立するわけである。

(52) 多様性の認定は、多く「衆多非一」「〇〇非一」の表現を

取る。例えば、「夫忌諱非一、必託之神怪」(四諱篇)、「民
犯刑罰多非一」(調時篇)、「時日之書、衆多非一」(識日篇)。

このような表現は、骨相篇第十一などにも既出しているが、
それが後期「數」のこの邊りで集中的に用いられている。

(53) 注38のグラフ参照。14の項。全體の緊張度が最も低位であ
る。王充は、自身の眼ではなく、統治者の眼でものを見てい
る。

(54) 「後漢書」卷四十八楊終傳によると、章帝及び第五倫は楊

終の影響を受けていたが、楊終は讖緯思想の持主である。(狩
野直喜「兩漢學術考」白虎通義の項参照)ところで、いま考
えねばならぬのは、楊終の上疏文に「愁困之民、足以感動天
地、移變陰陽矣」とあるように、讖緯説は民衆の聲を代辯し
ているということである。讖緯説を含む鬼神の世界のもつ政
治的な意味を、王充は理解しなかったようである。なお「後
漢書」楊終傳によれば、白虎觀會議の開催も彼の提唱による。

(55) 「心」による認識論は、既に薄葬篇第六十七で見えていた。
王充によれば、「性」は「五常の氣」が「胸中」で發現した
もので、人間の物質的側面の胸中への反映である「情」と對
比される。實知篇には「聖賢不能知性」とある。ここを「生
知」の誤りとする黃暉の説(論衡校釋)には従わない。

(56) 富永仲基「出定後語」第十八に、「苟於其身、爲善則可、

亦何擇乎性之善惡」、「苟於其心、無惡則可」とある(岩波書
店 日本思想大系43)。批判精神(富永仲基の場合は、「加上
説」に代表される)が何ものかに拜跪する時、それは精神主
義に豹變する。絕對化された對象には批判は及ばない。ただ
絕對的なものへの忠誠(善心)のみが批判の規準となる。
王充が「至誠・實誠」を、富永仲基が「誠の道」(翁の文)
を、各々最後の據り所とした所以である。

(57) ここは滕文公下篇。「不得已」は、孟子の好んで使う表現
である。王充もそれを意識していたようであり、明零篇に「惠
愍惻隱之思、不得已之意」と書いている。これは「孟子」公
孫丑上篇の文に基づくが、傍點部孟子の原文は「不忍之心」
となっている。

(58) 辨崇篇第七十二の「我有所犯、抵觸縣官」に見える「我」
は、一般的に「我々がした場合には」といった意味で使わ
れていて、特に作者を指すものではない。どうしても作者を
指す必要がある時には、「論衡之人」(須頌篇・對作篇)や
「造論之人」(佚文篇)という三人稱によって代用された。
それだけ「吾」は周到に隠されて來たのである。

「史記」太史公自序では、作者は「遷」「太史公」として
表示され、一人稱「余」は、「太史公曰」として、直接話法
の中でのみ用いられる。このような「余」の用例は、「史記」
全卷にわたって見えていて、「自序」に特有ではない。「漢
書」敘傳でも、作者は「固」と三人稱で表示されるのみで、

一人稱が直接露出することはない。ここで「吾」が現われたのには、やはり「論衡」独自の事情があると考えるべきであろう。

(59) この一句を下の「無誹謗之辭」と對句をなすと見なし、「須」を衍字とする。須頌篇に、「無褒頌之言」の表現がある。この箇所については、蔣祖怡「論衡篇數考」（中華文史論叢第二輯 一九六二年 中華書局）に考證がある。

(60) 太平御覽卷六百二引「論衡」自紀篇（部分）の後に「論衡造於永平末、定於建初之年耳」と見える。黃暉はこの文を「會稽典錄云」として引く（論衡校釋）。「造於永平末」にも問題はあるが今觸れない。建初は八年まで。「論衡」（自紀篇を除く）中では、建初五年が明記された年の下限である（驗符・恢國篇）。この後にもかなりの分量の著述がなされているので、その期間を考慮した。なお「論衡」には班固の「漢書」を読んだ形跡がないが、鄭鶴聲「班固年譜」（商務印書館）の考證によると、「漢書」の完成は建初七年のことである。

(61) 自紀篇に、「充以元和三年、徙家、辟詣楊州、部丹陽九江廬江、後入爲治中、……章和二年、罷州家居」とある。王充六十歳〜六十二歳の間に當る。再仕官の影には、同郷の友人鉅鹿太守謝夷吾及び司空第五倫（元和三年引退）の助力があったものと思われる。辭職の第一の原因は、願望と現實との隔りを自覺したことにある。なお章和二年は章帝死去の年でもある。

「論衡」に於ける意・數・體（小池）

(62) ただし王充の最も慕うのは、あくまでも孔子である。自紀篇に「可效放者、莫過孔子」。

(63) 後世の批判も同じ傾向にある。例えば、「其文詳、詳則理義莫能覈而精、辭莫能肅而括、幾於蕪且雜矣」（宋・高似孫「子略」卷四 百川學海、學津討原所收）

(64) 對作篇では、「眞」は「美」であり、「眞美」は「華」と對立するものとして捉えられている（虛妄之言、勝眞美也、……華文放流、則實事不見用）。これは、「眞實」の守り手としての自分を國家に賣り込んでいるのである。それだけ事は具體化している。超奇篇での「華美」強調と比較されよ。

(65) 自紀篇に「經傳之文、賢聖之語、古今言殊、四方談異也、當言事時、非務難知、使指閉隱也」、「夫文由語也」とある。この點に關してカールグレンは、「彼は自分の話し言葉に密着して彼の文話 wen hua、彼の文語を作りあげた」（大原信一譯「論衡の言語的特性」人文學九十四號）と述べているが、自紀篇での文章論を「論衡」全篇に當てはめるには、なお慎重であらねばならない。

(66) 高橋和巳に次の指摘がある。「もっぱら歴史家たちによって事實の記述として、あるいは思想家たちによる道義や政策の理論的表明として發展させられた、簡潔、緊密なへ古文」をはみでる個々人の感情の自覺が、美文の誕生の第一原因だったといえる。」（「六朝美文論」河出書房新社 高橋和巳作品集9所收）

67 散文部は結論を述べるので、情的になりやすい。次の例は、散文部で既に「吾」の露出したものである。

身與草木俱朽——行與孔子比窮——高榮之
聲與日月并彰——文與揚雄爲雙——^(△)

68 例。五帝不一世而起、伊望不同家而出、^(△)
千里殊跡、百載異發、

士貴雅材而慎興、不因高據以顯達、

母驪犢驛、無害犧牲、

祖濁裔清、不勝奇人、[▲]

押韻(△△印)は、羅常培・周祖謨合著「漢魏晉南北朝韻部演變研究」第一分冊(科學出版社)に従った。

69 王充の没年は明らかでない。「後漢書」王充傳に「永元中、病卒於家」とあるのが唯一の資料で、黃暉年譜(論衡校釋附篇二)は、永元八年(九六)王充七十歳をそれに當てている。なお、六十四・五歳の頃に「養性之書」十六篇を書いたと、自紀篇に記す。

70 押韻は、注68に挙げた書に従う。

71 揚雄「元后誄」は、「惟……」に始まり「嗚呼哀哉」に終わる、四言隔句押韻の韻文である。「古文苑」卷二十所載。「古文苑」は良質なテキストではないが、この誄は「藝文類聚」卷十五にも一部を引いているので、資料として採用した。

72 碑辭は、誄形式を受けつぎつつ、後漢中頃以降獨自の發展

をとげた。碑辭の抒情化し、五言化したものに、例えば「費鳳別碑」(一四三年造 隸釋卷九所載)がある。その一部のみ引く。「……見吾若君存、剝裂而不可止、壹別會無期、相去三千里、絕翰永沈恨、泣下不可止」

「命以不延」は、碑辭によく見える。例えば「愼令劉脩碑」(一七一年造 隸釋卷八)に「知命不延」とある。これについては、「史記」卷一〇九魏其武安侯列傳の「太史公曰」に、「嗚呼哀哉、遷怒及人、命亦不延」と述べるのと、何らかの関連があろう。

73 例を挙げる。(上文が自紀篇詩)

消爲土灰、——朽而成灰土、(論死篇)

上自黃唐、下臻秦漢而來、——上自黃帝、下至秦漢、(別通篇)

如衡之平、——論衡者、所以銓輕重之言、立眞僞之平、(對作篇)